

ハイウェイの恐竜

平井和正



彼は、夜の高速道路上にあった。

彼の身の丈は約十五メートル、体重は三十トンを超えた。巨大な頭部はほとんど口で占められ、さしわたし三メートルもある口には、剣のような鋭い歯がびっしりと二列に生えていた。目は燃える石炭のように真っ赤だった。

巨木のような脚に踏みしめられるたびに、ハイウェイはぐらぐら揺れ動き地響きがあがった。

時速百八十キロで疾ばしてきたスポーツカーは耳を削る急ブレーキとスキール音の軋りを断末魔の絶叫のように放ちながら、コマのようにスピント。ガードレールに激突し、形状をとどめぬほど潰れた。なぜかステレオサウンドの快適なミュージックだけが途切れることもなく鳴っていた。

一瞬にして無価値になった高価なスポーツカーの中でふたりの若い男女が赤ペンキをぬりたくった壊れた人形のように動かない。もはや恐怖も苦痛も感じなくなっていた。

車の群れが次々に急停止し、ドライバーたちは信じられぬ驚きの表情を顔に凍りつかせ、己が目を疑っていた。事故で全壊したスポーツカーになど、誰も気がつかなかった。テイラノサウルス・レックスを見た人間はだれもいない。人類が地球上に姿を現す数億年前に絶滅し、地上から姿を消してしまったからだ。

が、いまハイウェイに立ちはだかっているのは、史上最

大の捕食恐竜、恐竜の帝王と呼ばれるティラノサウルス・レックス以外のなにものでもない。

夜のハイウェイを照明するナトリウム灯の青白い光を浴びて、夜空に塔のようにそびえ立つティラノサウルス・レックスは圧倒的に巨大であり、偉大ですらあった。

この世のものとは思えぬ威厳に満ちていた。それは真の王者だけがそなえる超越的な威厳であった。

恐怖に駆られる人間たちは、車を捨て、走り逃げた。これほどのパニックを経験する人間はまたとないであろう。が、ティラノサウルス・レックスは足元に蠢くゴキブリのような人間たちに一顧も払わなかった。そんなちっぽけな、奇妙な生物に関心はないのだ。彼の征服すべき相手は、彼自身よりも更に巨大な生物なのだから。彼、ティラノサウルス・レックスは、王の中の王なのだ。

ティラノサウルス・レックスは、ハイウェイ上に置き去りにされた車の群れに対しても、まったく無関心であった。真の王者という超越的存在は、些事には拘らないものなのだ。

そうだ。人間が空想でつくりあげた虚構の巨大な怪獣たちは、彼のそなえた気品に比べれば、品性欠けた卑しい腐肉漁りにもひとしかった。彼ら虚構の怪獣は、あまりにも人間に似て、さもしく卑しすぎたのだ。

ティラノサウルス・レックスは悠然とハイウェイに歩を運んだ。その歩みは気高く、足元の車をわざとらしく押し

退け、踏みつけるような真似はしなかった。彼は真の王者であり、映画制作者のために創造されたまがいものではなかったから、劇的效果を狙うハツタリとは無縁であった。たまたま巨樹のような偉大な尾に触れた車がハイウェイから押しやられたとしても、それは単なる偶然でしかなかった。

たとえば、サイレンをわめかせて警察の車輛が次々に駆けつけたとしても、この王者に対して何ができよう。ハイウェイを首都方面へと威風堂々と行進するティラノサウルス・レックスに、道を開けることしかなし得なかった。ティラノサウルス・レックスという偉大な覇者が、いかに美しく神々しいほどの王者であったか、人間たちが悟ったのはずっと後のことである。

人間たちが彼に何をしたか、それを語るのは気が進まない。人間たちは「母なる自然」の産んだ最高に素晴らしく美しい存在に対して、いつも彼らのやるようなことをやったのだ。

そうだ。美しい山河を無残に破壊し、野生動物たちを片端から殺しまくった人間のことももの。

ティラノサウルス・レックスを、首都に近づけるな、という命令を受けて、軍隊が出動した。待ち構えていた戦車の巨砲が火を噴き、砲弾を胸に受けたティラノサウルス・レックスの巨体は崩れ落ちた。卑劣な暗殺者が王者に放つ銃弾に貫かれて、偉大な帝王は地響きたててとうと倒れた。

大量の肉片を飛び散らせ、ハイウェイを血の河に変えて、テイラノサウルス・レックスは息絶えた。地上最大の威厳に満ちた王者は死んだ。

人間どもは彼の肉を食らい、巨大な骨だけにしてしまった。集まった群衆はてんでに巨大な骨を砕き、スーベニールとして持ち帰り、後には何も残らなかった。ハイウェイの上にはただ風が吹きすぎた。

終

追記

1960年代末期の作品であるらしい。

テイラノサウルス・レックスという存在には、人の心に訴えかける何かがあるようだ。人間など目もくれないテイラノサウルス・レックスというイメージには真の王者の超越が感じられる。読み終わって、じん、としてくれませんでしたか？

ハイウェイの恐竜

デジタル版

発行日 2000年6月3日

著者 平井和正

イラスト 長尾 太

デザイン ルナテック

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI、FUTOSHI NAGAO、LUN
ATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複製・複製・転載することは禁じられています。